

福島 和男

「〔第一部〕被爆以前の中島地区 古里の町並みと思い出」より抜粋

H字型の相生橋

昭和7年12月に相生橋が電車併用橋として架け替えられた。昭和9年10月に相生橋中央部から中島慈仙寺鼻へ橋桁が接続された。昭和12年7月に日中戦争が勃発（ぼっぱつ）しました。

新しいT字型の相生橋が完成した後も、当分は木造の旧相生橋が慈仙寺鼻から東の猿楽町と西の鍛冶屋町へ架かったままでした。この風景が横から見るとH字型に、正面から見ればIの字にも見えました。2つの老朽化した旧相生橋は昭和14年に撤去されて、T字型の相生橋だけになった。

旧相生橋がなくなってからは産業奨励館向かいの釣具店へ釣道具やえさを買いに行ったり、田丸眼科へ通院するのにT字橋を渡るようになって大変不便になった。また本川小学校へ通学する子供たちも旧相生橋がなくなり、T字橋を渡るので学校が少し遠く？なった。

この橋を米軍が原爆投下の目標にしたが、被爆にも耐えてきたT字橋も十数年前に老朽化のため撤去された。そして旧T字橋より大そう立派な相生橋に生まれ変わった。（中略）

町内も平和で活気にあふれており、朝早くから煮豆屋やとうふ屋が来たり、10時頃から八百屋が大きな荷車でやって来て祖母に「おごうさん（奥さん）野菜を買って下さい」と言って、商売が成立した後はうちの土間へ座りこんで雑談をしていました。また行商の小鯛（いわし）売りはリヤカーを押して「ナンマンエー…イワシエー」と売り声でやって来るが、小鯛より他にハッタイ粉（麦を煎って石臼で引いたもの）などがあったので、それを買ってもらい砂糖と混ぜてお湯で溶いて食べていた。

「〔第二部〕被爆体験 肉親さがし」より抜粋

被爆した時、私は山陽中学（工業学校）の2年生（13歳）でした。学徒動員令によって桐原容器工業（株）（本社は舟入川口町）の己斐分工場に出勤していた。工場では火薬を入れる樽などを製造していました。

中島本町85番地（慈仙寺鼻）の自宅は爆心地から西へ約250mの所にあり、自宅には祖父・亀次郎、祖母・カ子（かね）、叔母の芳子と私の4人が居住していた。自宅の斜め前の福亀旅館には父・松吉、母・静子、従業員のお君さん、正田キミさん、滞在客の電気会社所長さんの5人がいました。私は朝早く工場へ出勤していたので無事でした。家にいた家族や従業員の人は爆心地の近くでしたから全員即死したようですが、遺体も不明でした。

姉は3月に結婚しましたが、嫁ぎ先の河原町から大手町の広島市農協へ出勤途中で被爆したが、遺体もわかりません。

8月6日の状況

8月6日朝もいつもと変わらぬ、平和な一日が始まりました…自宅に居た私は、旅館の方で寝ている父を建物疎開作業に行くようにと起こしてから、自宅へ戻り朝食をとった。

祖父は厨房の片隅で日課の自己流体操を元気にやっており、そばでは祖母と母が朝食の支度をしていました。私は母から弁当の包みをもって7時過ぎに自宅を出た。相生橋電停から電車に乗り、8時前に己斐へ着いた。電停からは歩いて庚午北町の己斐分工場へ出勤した。(分工場は爆心地より西へ約3km)

8時15分に自宅の真上の580mのところで原爆が炸裂しました。私たちは始業前で工場1階作業場で雑談していたが、そこに突然目の前でフラッシュをたたいたような閃光が走った。その一瞬は息が止まったようで苦しかった、そのすぐ後にドーンと大きな爆発音と同時に強い突風と大地震がいつぺんに来たような衝撃を受けた。(中略)

8月10日

10日に私は被爆後初めて自宅の焼け跡へ、叔父、叔母、従兄の4人で遺骨の収納に向かった。牛田町の家を出て常盤橋～白島～西練兵場～紙屋町～護国神社の大鳥居前を通り相生橋東詰付近まで来たが、右側の電车用変電所の赤レンガの建物は完全に崩壊しており、横の商工会議所の建物は完全に残っていたが内部は焼失してコンクリート部分だけが見えた。左側の日本赤十字社の小さな鉄筋の建物は外壁だけ残し内部は完全に焼け空洞になっていた。すぐ奥の産業奨励館(原爆ドーム)も無残にも焼失して、外壁が半分位と丸い屋根の鉄骨が残っていた。ただ一日で変貌した町を見ながら相生橋へ差しかけた。

橋のコンクリート製欄干の一部は残っていたが、ほとんどが歩道の上に倒れたり川へ落ちていた。北側の歩道が一部分「への字形」にめくれ上って通行不能になっていた。橋の上にあった遺体は整理されていたが、まだ馬の死体が横たわっていた。それも数日後に通った時には川底に見えた。相生橋周辺の被害状況を目の当たりに見た時には、強烈な爆弾の威力を痛烈に感じました。

橋を渡ってからまず最初に瓦礫(がれき)だけになった我が家跡へ帰った時は、本当に悲しみがこみ上げてどうしようもなかった。近所の遺体処理も一応終わっていたが、焼け残りの骨や肉魂も少々あった。(中略)

8月15日終戦以降

お盆頃に品物を取りに行った時は埋めた所は掘り返されたままで全部盗まれていた。それで実家跡へは足が遠退くようになった。もし実家跡にどこからか?伝言が来ていないかと期待しながら時々行ってみたが、やはりだめでした。それから日一日と家族の生存も

あきらめるようになった。

あの頃は精神的にも独りぼっちになった淋しさから肉親のことが最も恋しくなった時期でもあった。被爆して熱いがれきの中をさまよう時は、無情にも肉親の死を悪い方に考えたことを思い巡らし済まない気持ちになった。誰でもいいから万一どこかで生きていれば話もしたいし、自分の元気な姿を見せて安心させたい気持ちがつのるばかりでした。

一縷の望みをもって、本川国民学校、袋町国民学校、己斐国民学校の各救護所を捜して回りました。学校の教室が救護所になっており、火傷に薬をぬった人や包帯や三角布で傷を覆った患者さんが教室でごろ寝の状態です静かに休んでおられた。どこの救護所へ行っても薬の臭いや腐敗したような臭気でした。

また他にも逋信病院、日赤病院へも行きました。ここでも家族や知人はいないかと患者の顔を試みに見て回ったが、あまりにもひどい人が多くまともには見られなかった。どこの病院、救護所でも治療中の患者さんや死亡した人の名簿が置いてあり、それもすべて見て歩いたが、とうとう探し出せなかった。

いまだに甚だ残念に思うのは、8月6日自宅が鎮火した頃に無理しても相生橋の方から帰って、家族の消息を確かめたり、実家の状態を自分の目でよく見ておけばよかったと後悔している。しかしあれこれと思案すると、もしも爆心地に近い自宅付近に入っていれば多量の放射能を浴びてから原爆症になったかもしれないと思うと、複雑な気持ちにもなり恐ろしくもなります。

*読みやすいように文字の変換や句読点、送り仮名などを一部補っています。